

池地喜久雄	21・2・1 (ピラ)	北海道	上
永安 光夫	21・2・3 (ピラ)	長崎県	一
伊藤 武	21・2・4 (ビロビジャン病院)	北海道	上
三宅勇太郎	21・10・10 05:30 (バブストア)	香川県	上
佐々木善男	21・12・21 (ピラ)	北海道	一
安部 保枝	22・12・23 (キルガ)	東京都	憲伍
佐藤 隆正		東京都	憲兵
伊尾 政男		福井県	
桜井 正夫			
大原 盛信		愛媛県	憲兵
〔以上十二人 遺骨箱により〕			
峰田 十七		山形県	
往田 栄二		石川県	

〔以上二人は、確実な人よりキルガ病院において死亡したことを確認して記録した〕

合 掌

シベリアでの思い出

千葉県 久保田 精 一

四十数年前のシベリアを思い出せと言われても忘れたことも多い。今考えると終戦でよかったと思う。負けて終わったことは、悔しく残念であった。今ここに形容の言葉がない。

私は満州現地召集、半月で終戦、武装解除抑留ということになった。本来なら戦争が終結した場合は復員に導くことが道義であるが、ソ連は日本軍を抑留、いや一般日本民をも抑留した。日本軍の倉庫に満積されていた食糧、被服類等を日本軍の手により鉄道輸送でソ連へ搬入し、続いて日本兵を国内へ輸送したのである。臨みを迎えている妻を異国（今自分がいる所から何キロでもな

い)に残し、治安を失い、ソ連軍が侵入し無法に行動している姿を見て、妻はどうしているだろうと考えたとき、いても立ってもいられない思いであった。

氷が見られる十一月初旬、新京を後に荷物列車で北へ向かった。新京で編成された混成隊である。行くえはどこか、何の目的か、誰も知らない。帰国なら南へ向かうはず、北へ進んだ。

多くの者が走る列車から飛び下りた。列車の屋根に乗っていた歩哨が射撃した。多分大体が命中したと思っている。一週間くらいでソ連へ入った。数日走り下車、久方の入浴、チタであった。また乗車、さらに前進する。満州よりもっと広い荒野と感じた。駅から駅が大変遠い。駅では長い停車をした。おろすところを探しながら進んでいるようだ。外が見えないのでどこを走っているかわからない。遂に下車の命令が下った。出発から二十日以上過ぎていた。一個大隊千五百人が倉庫のようなところへ分かれて入った。チレンホーボであることを知る。ポタ山が真っ白い原野に数カ所見える。この附近に炭鉱が三十ぐらいあるとか、炭鉱の町である。

これから一か月がシベリアの一番寒いとき、満州の寒い夜にはなれていたが、一段と寒さを感じる。これよりシベリアの生活が始まった。

便所をつくる者、兵舎をつくる者、作業に外へ出る者等さまざまである。いろいろの技術を持つ兵がいるので、何をやっても素晴らしい能率にソ連人はびっくりしていた。ただ食べるものが粗末で次第に体力を失った。当初かゆが主食で何もつかなかったと思っている。そのかゆもお湯の中に米粒がいくつ浮かんでいる程度のものであった。作業場へ行ったとき、草の根を採取、持ち帰りゆでて食べ、飢えをしのいだ。時には毒草を食べ、数時間発狂状態になった者も数多くいる。空腹が続く夜も眠れないつらい体験もした。日本の防寒靴で作業をしていたが、凍傷にかかり二十日間も治療したこともある。疲労と厳しい寒、入浴できないため不潔で栄養失調のため多くの同志を失ったのもこのころである。

兵舎が建てられるまでのかなりの期間を要したか記憶もない。兵舎といっても穴を掘り、掘って小屋式で窓から下は地下、屋根は板を張り土を乗せる程度、雨が

少ないのでこれで十数年は大丈夫らしい。入浴も十日に一度くらいで、浴場ができるまで、歩哨がついてかなり離れた町までいった。水の少ない国で洗面桶二杯の水ですべてを済まさなければならなく、湯にかかるなど想像もできない。衣類も全然洗濯せず、入浴中に消毒室に入れ、加熱乾燥させる方法であった。二か月位で大部分の者は炭鉱で働くことになった。毎月身体検査を行い、弱い者は地上、丈夫に者は地下の作業である。私は最後まで地下作業であった。炭坑は三交替制で、一番方午前八時から午後四時まで、二番方午後四時から十二時まで、三番方十二時より翌朝八時まで、十日目に番方が繰り替えになり、繰り上がるたびに寝る時間が少なくなり苦勞した。

このころは食事も一日三百グラムの黒パンが付され、幾分よくなったが、仕事から空腹が続いた。

炭鉱の仕事は激務である。ハッパで崩した石炭を円匙でベルトコンベアへ乗せるのであるが、ノルマは一人十トンであった。五トンまでは円匙を動かすだけで積めるが、落盤を防止するため、大きい丸太を運び切り合わせ

ながら鳥居型に構築しなければならない。これが済むとつるはし等を使って掘り起こすのである。危険防止の作業は大事な仕事であり、技術的な面もあり、力の必要な作業で空腹はつのるばかり、機械でも止まるとみな集まり、正月の餅が食べたい、お祭のだんごが食べたい、食べたい話ばかり、空腹のつらさを物語る。作業中時には落盤が起こる。コンベヤによる採炭は広い空洞ができるので、一部落ち始めると全部落ちるおそれがある。兆候がみえたら素早く退避することである。ノルマの遂行は強く要請された。

夜間ラーゲルでのどが乾き、水がなく汚れた雪を食べたこともあった。

作業の往復に畑の中で拾った冷凍馬鈴薯（腐ったように見えるが澱粉質は残っている）を持ち帰り、ペーチカで蒸し飯盒の中で棒でつき餅にして食べた。高級のおやつであったろう。

作業の合い間に職場やラーゲルで集会がよく行われ、日本人向け新聞でソ連の社会制度を評価したり、反動的な者を裁いたりされた。指導者は若い者で専門指導を受

けた者が当たった。裁かれると気持ちのよいものでないので、みなかぶれたふりをしていた。同胞であっても油断を許せなかった。

こうして私どもは三年間の地下作業を終わった。大部分の者は帰国したが、私は一部の者とイルクーツクのラーゲルへ転属した。全然知らない人たちとの生活がまた始まった。今度は昼間の作業、主として道路の舗装であった。危険もなく、太陽も見られ生きたような気持ちであった。食事も以前よりよくなり、一年は過ぎ帰国の日が来た。三百人くらい他へ転属した。この人たちは元警察、憲兵であったと聞いた。

イルクーツクを後にナホトカへ一週間を要したろうか。ナホトカには輸送船を待つ大勢の同胞がいた。ソ連の労働歌を歌ったり、出港する者に赤旗を振って送る者、さながらお祭である。ここに長くどどまる者、ここまで来てまた帰された者もあると聞く。私は一週間くらいで昭和二十四年八月二十九日に乗船することができた。船中いろいろの出来事があったと聞くが、我々の船中は極めて平穩であった。九月一日上陸、舞鶴港で検疫

を済ませ、無事復員することができた。文面に限りがあり十分な表現ができないが、概要を申し上げます。

寒さ、飢えなど四重苦にあえぐ

島根県 足立 秋男

「あれ？あの山はどこかで見えた山だ。ここは一体どこだろう？」私は穴のあくほど山を見詰めた。

昭和二十年九月中旬、満州間島省の省都・延吉街を出発して連日の行軍。八日目ごろ、この山の下砂利道を進んでいた。降伏した日本軍は、延吉でソ連側の要求により一千人単位の作業隊を次々に編成した。作業隊は戦争で壊れた橋や道路を修理しながら北鮮へ進み、北鮮から船で日本へ帰す——というのがソ連側の口上。実際には行軍一点張りで作業は全然なく、琿春街を通過した後も隊列は南東の北鮮へ向かわず、進路を北東へ取っていた。

山の下を通過して約五時間後、やっと思い出した。私